|  |  |
| --- | --- |
|  | 小千谷旅する案内帳「千の谷の物語と雅色の郷　小千谷」 |

**五　智　院・日本初の公立小学校・蝋座跡**

ガイド案内

* かなり大規模な陣屋で魚沼の幕府領を会津藩が預かっていました。
* 真言宗の名刹、僧侶の学問所でした
* 日本で最初の公立の小学校が寄宿制で始まりました。
* 戊辰戦争中、死罪覚悟で、私財で長岡藩の孤児を救済しました。
* 陣屋の屋根の一部が、地蔵堂の屋根として移築されています。
* 幕末に起きた戊辰北越戦争で、長岡城が５月に落城し、孤児となった藩士の子等は小千谷に流れて来て浮浪児化しましが新政府は保護を厳禁しました。長岡藩は会津に敗走して戦っている真最中（降伏したのは9月23日）に、小千谷の元縮商・山本比呂伎は子供達の窮状を見かねて、死罪覚悟で、私財１千両（米２千俵位）を５年間で献納する約束をして柏崎県知事に２度にわたって建白し、許可され、明治元年１０月1日に寄宿制の公立小学校が開校されました。全国に学制発布されたのは4年後のことです。
* 建白書抜粋：・・彼らを保護し教育致します。教える方法は決して急いで追い立てる事無く、いたわり、親しみ、間違いを正し、まっすぐに伸ばし、のびのびさせ、悠々と、自ら飽きないようにさせ、正に水が潤い沁み込んで、川の窪地を満たしながら進むように、次第に人の中に自然に備わった固有の特性を育て上げていくことが大切であります。そして、旧長岡藩士の子弟だけでなく一般のすぐれた者も等しく皆、学校に入れ、一人の民も学問の無い者がないようにし、どの家にも教養の無い者がいないようにする事が肝要であります・・・

エピソード

* 山本比呂伎について：１２歳で刈羽の三余堂（さんよどう）に６年間、寄宿して儒学などを学んだ後、神道学を学びました。幕末時41歳。最愛の妻と息子を相次いで亡くし、悲嘆にくれている時でした。自宅を民生局に提供し協力を惜しみませんでした。新政府はその博識に驚嘆し、信頼し、何かと相談を持ちかけました。子供達を自ら教育するだけの学識がありながら、めざしたのは公立の学校という建前であり、自分はあくまで影の存在として、学校経営に奔走しました。
* 蝋座とは：ロウソクの製造工場です。江戸時代は幕府の専売品であり、魚沼各地から集められた原料（ウルシの実穂）を貯蔵、製造し、江戸に送られました。間口15間、奥行３間の広さで、風呂、台所、蔵もありました。幕府が四月に滅び、江戸に出荷する必要が無くなり、空き家となっていて、そこを寄宿舎として使用しました。
* 下女に若様と呼ばれて育った子供達は４ヶ月もの間、お寺の床下や神社のほこらに隠れ住んでいました。空腹を満たす為に盗みを働いたり、料亭の裏口から残り物を分けてもらいました。賊軍の子と呼ばれ、地元の子供とけんかになる事もありました。子供のことなので、夏の間は川原で遊んで、衣服を洗って乾かす事もできましたが、旧暦の９月といえばもう10月です。寒さが身に沁みる頃です。蝋座に収容されて、お風呂に入り、新しい着物に着替え、暖かい布団にくるまり眠りました。そして、元気良く五智院の教室に通ったのでした。
* 小学校はその後人数の増加により、転々と移転しましたが、現在地の土川の広い敷地に移った時は、校舎の建築費の全額を『豪商・西脇邸』の西脇済三郎（さいざぶろう）翁が寄付さいました。
* 生徒名簿や学校日誌、全７冊に創立時から６年間の記録が克明にに記載されていて、学校が度々移転されましたが紛失する事無く保管されています。又、建白書の中に『小学校』という言葉が使われていることにも驚きです。
* 明治になって、新政府から徳川にまつわる物の提出を求められましたが、住職は家康ほか歴代将軍のお位牌（高さ約1ｍ）を壁に塗り込み隠しました。約100年後の昭和43年になって、雨漏りの補修時に発見されました。住職は誰にも言い伝えていませんでした。
* 謎の洞穴（ほらな）があります。天竺に登る崖の下にあり、中は迷路になっています。大盗賊の風大尽（かぜだいじん）が莫大な黄金を隠すために、昔、崖の上にあった慎地城（しんちじょう）の地下に掘られ、五智院の下に通じているといわれています。
* 徳川家光から歴代１0万石の朱印地を拝領し、大々名並みの格式を許され、特別の欄間（竹節井桁欄間）や住職用の飴色網代のお駕籠があります。大名は門前で駕籠を降りるように定められていました。陣屋からは挨拶に伺いました。
* 学校設立後の苦難：当時は柏崎県ができ、各地に民生局が置かれ、民生局立小学校が各地に開設されました。ところが翌年２年９月には民生局や学校は廃止するよう通達されました。他校は皆、廃校しましたが、山本比呂伎の強い熱意で創立された小千谷校は私塾として苦難を乗り超え存続しました。翌年3年7月になると、県は県学校再建の書類提出と2回目の献納金を督促しました。山本は書類を提出すると共に、私塾経営の苦しさを訴え、献納金の延納を申し出ます。ところが、県は、小千谷校を認可せず、献金も不要と通告しました。翌年4年10月になって山本の偉業を褒賞し、柏崎県分校として認可しました。いわるる分校ではなく、県から遠いという意味です。

メモ